

【発表会社会】 第52回

「この社会には発表会が満ちあふれている」(①宮入、9頁)。日本の国家再編も、オリンピックと万国博覧会という2つの〈発表会〉で再起動させられようとしている。名古屋では、8月に国際展示場が稼働する。ライブ・コンサートの会場や博物館がなくて東京・大阪のあとイベントがスルーされることが多い。「どまつり」は路上である。一般に、読書、音楽鑑賞、テレビや新聞、音楽配信やネットショッピングなどは、手持ちの媒体で発表会を構成しているようだ。現代は商品社会である。商品は〈見て買う〉ので、発表会は必然的な形態かもしれない。

発表会は、学校や園の中の活動であると同時に、学校や園が発表会社会の中にある。土川五郎は「見るもの」と「見せるもの」を区別し(②104頁)、倉橋惣三は、学校劇を「学校の中ですること」と「学校外に公開的に演出する」ことを区別した



(127頁)。「劇遊び」は1938年に山村きよが提唱した(167頁)。南は一般への公開がなくなると起る問題を指摘している(164頁)。

大ホールでやっているからこそ、3歳児が来年お姉さんお兄さんたちのようにやりたい心を持つことがある。逆に、劇遊びを発表会にすることで、日々見立てを変えて創造的に遊んでいるものが「劇発表で〇〇にするって決めたでしょ」と否定されることもある。

「限界芸術」(鶴見俊輔)を(①蘭田碩哉、18頁)、子どもと専門家をつなぐ保育教育に置き換えて、そこに本誌の藤井清美さんの連載を重ねてみると、〈見せないところ〉の奥義が語られていると読める。

(研究部・加藤聡二)

参考文献

- ①宮入恭平編著『発表会文化論 アマチュアの表現活動を問う』青弓社、2015年。
- ②南元子『近代日本の幼児教育における劇活動の意義と変遷』あるむ、2014年。